

---

# **流星のロックマン 「神の雷」計画**

赤い水性ペン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン 「神の雷」 計画

### 【著者名】

Z3859H

### 【作者名】

赤い水性ペン

### 【あらすじ】

地球を3回救ったスバルたちの前に新たなる脅威が・・・

## 第1話 いつかいつの放課後

西暦22××年、地球は3回ほど滅ぼされかけるといつ事件がおきた。

1つ目はFM星人の地球侵略・・・・・

2つ目は古代文明「ムー」の攻撃・・・・・

最後は、巨大なノイズの隕石「メテオG」

それらはどこにでもいるような普通（？）な少年とその仲間の活躍により解決された。

だが、まだ彼らはまだしらない・・・・・

地球上新たな危機が迫っていることを・・・・・

- 地球 (「ダマ小学校」) -

キーン・コーン・カーン・コーン

「おっと、今田はここまだだな。白金」

「はい！起立！例！」

「「「「さよなら」「」「」「」

「氣をつけて帰れよ。」

「 「 「 「 は～～～～」 「 」

「スバル君、一緒に帰ろうよ。」  
ツカサがスバルに話しかける。

「もちろん。委員長達も帰ろうよ。」

「私達は遠慮しとくわ！――」

『パパパパ――――――

ものすごい地響きとともに委員長が返事をかえした。

先日たまたまミンラが出演してたテレビの会場でウイルス事件が発生した。

そのときたまたま近くにいたスバルがロックマンとしてウイルスを全消去したのだ。

ミンラ（ハープ・ノート）とともに戦つてることを全国放送でながされたわけだ。

つまりルナでいう「愛しのロックマン様」が他の女と仲良く（？）戦っている所を

全國民がみていたわけでして、委員長も例外でないためはげしくいかつているわけだ。

「は、はい、す、すみませんでした。（怖い……）」  
地球のヒーロースバルでさえこれは恐ろしい…………

「ゴン太！キザマロ！早く行くわよ――――」

「 「は、はひイ～～」 」

三人はさつさと帰ってしまった。

ここからある事件が発生する・・・・・・

## 第1話 いつかやがつたの放課後（後書き）

初めての作品なのでよくわかんないところもありますが暖かい目で見守っていただければうれしいです。

## 第2話 帰り道

スバルとツカラサは下校中だった・・・・・・

特に話もせずに沈黙のままだった・・・・・・  
だが、ツカラサが沈黙をやぶる。

「ねえスバル君・・・・。君はまた地球に危機がせまつたら戦うの  
?」

驚きの発言だ・・・・・

「突然どうしたの? そんなこと聞いて・・・・・

「いや・・・・ちょっと聞きたくて・・・・・」

「ま、まあ皆が僕を、ロックマン信じてくれる限りどんな敵とも  
戦う覚悟だよ。」

なんかかっこいいことを言つてみた・・・・スバルにも自覚があつ  
た。

「そつか・・・・そのときは僕も手伝つかね。」

またまた驚きの発言・・・・・

「へ?・・・・」

わかっているが一応確認しておく。

「だから、ぼくも君たちと戦つよ。」

「…………」

「僕もそろそろ一人で見てるのがいやになってきたんだ。」

「…………」

「こつも嫌な思いをするのはきみばかりだつた。」

「…………」

「だから僕も君たちと一緒に戦いたいんだ。」

「…………（こつものツカサ君じゃない…………）」「そのうちスバルの頭には「そうか、夢を見てるのか」という答えが出てきた。

「や、そりゅうことなら…………一緒に戦おうね…………」

スバルはどうせ夢だと悟ったから適当に返した。

「あ、そろそろ行かなきや、じゃあねー！」

ツカサはウエーブライナーで帰るために先に行ってしまった。

「…………」

「…………」

「…………」

「・・・ねえ、ロック。ほっぺつねって。」

夢かどうか確かめる時のお決まりである。

「いいのか?」「

そして今回初登場のウォーロックは出番が少なくいらついていた。

「うん」

「じゃ、遠慮なく。」

ウォーロックは思いつきリスバルの頬をつねった。

「いつた～～い！イタイイタイイタイイタイ～～～～～！」  
当然である。

「おっと、チイと力入れすぎた・・・。すまねースバル。（わざ  
とだぜー）」

ウォーロックのいい気分転換・・・（ストレス解消法＝戦い？つて  
かこれはいじめ？）

「ひどいよー、いくらなんでも力いれすぎーーー。」

「帰らひづぜーーー。」

「話を流すな・・・つてもうこんな時間？早く帰らなきやー。」  
時間という存在を忘れていたスバルはダッシュで家に帰つていった。



## 第2話 帰り道（後書き）

はのぼのしすきもつまらないので早速動きをだしてみました。  
けどなんか納得いかない・・・  
なにかアドバイスあつたらどんどん言ってください。

### 第3話 戦いの予感

スバルは家についていた。

ソファーに座つてテレビを見ていた。

適当にチャンネルを回しているとミソラ関連の番組がやっていた。司会者が今話題の人間に聞きたい10の質問を問い合わせまくるというものだ。

司会者は、相手が誰であろうと容赦なく質問を問い合わせる。今まで何人もこの番組の犠牲者が出た……。

「では、ミソラさんに質問です。ズバリ、恋人はいますか？」

「…………いきなりですか！？」

確かにはじめからこれだと考えてしまつ…………。

「うーん、いるといえбаいて、いないといえばいなくて…………」

「

「秘密ですか？じゃあ次の質問です。」

「スバルさんとの関係はどうまで…………」

ブ~~~~~

スバルが飲んでたお茶を噴出すのも無理ない…………。

「たまに一緒に遊びにいく程度です…………。ミソラが若干顔を赤らめて答える…………。

「つまりデートですか。いいですねー青春は…………。」

・  
・  
・  
ゲホ、ゲホ・・・・・・  
スバルが食つてた菓子をのどに詰まらせてもしかたあるまい・・・・

「テ、テー、ト・・・・・・」

ミンラは真っ赤だが見ているスバルは今にもメルトダウン（核爆発）しそうだった。

そして硬直しているスバルをいつの間にかとなりにいる茜がつづついていじめる。

「スバルもなかなかやるわね！！」

それをみていつの間にかウィザードONしていたウォーロックが・・・

（スバルのオフクロ、度S、だ・・・・・）

と小声でつぶやく。

ついにたまりかねたスバルはテレビを消しひつたりしながら部屋にいつてしまった。

ウォーロックも付いてぐ。

部屋に着いたスバルはぱつたりとベットに倒れこみブツブツ言つて  
いた・・・・

（あ～～つまんね～）

と思つたウォーロックは外を散歩することとした。

- - - 白金 ルナ視点 - - -

家に着いたルナはばつたりとベットに倒れこみぢす黒いオーラを発していた・・・・・

「あ～～～ムカつく！…なんでのハープ・ノートとか言うのがロックマン様と・・・・・」

「私は会つことさえほぼ無理なのに…！」

当然ルナはハープ・ノート（ミソラ）に激しく嫉妬していた。

「私に力があればあんな女ぶつ飛ばしてロックマン様を独り占めできるのに・・・・・」

「その願い、かねえてさしあげましょつか？」

その声とともに光が現れ徐々に人のような形になる。  
そしてそこには・・・・・

「アナタはなに？」

「おつと、失礼しました。私はアルテミス。弓術、狩獵、清浄をつかさどる月神です。」

「その月神がなんのよう？」

「アナタに復習のチャンスを『』えます。」

「な、何の『』よーー。」

「つまりアナタの夢をかなえて差し上げるとこ『』じでや。」

「そういうアルテミスが『』を放つた・・・・・・

そして近くの電腦の電波君にあたつた・・・・・・

「いつた～い・・・・・・ってあれ体が変化してこりますーーぎやあ  
あアアあア～～～！」

電波君の形が長くなつていぐ・・・・・まるで蛇のよう・・・・・

そして光の中から見たことある奴が・・・・・・・・・

「ふふふ・・・・力が湧き上がつてくるようだ。」

光の中からなんとオヒュカスのような奴がでてきた。

「な、なんなの？」

「私は、オヒュカス・ネオだ。」

「オヒュカス・ネオよ、そのものに力をかしてやりなさい。  
そういうとアルテミスは消えてしまった。」

「わかった。」

「あ、行きましよう・・・・・」

「ど、どいだよー。」

「アナタの敵のとこ『』るべよ。」

• . . . . . . . . .

### 第3話 戦いの予感（後書き）

うへへんいまいち面白みがたりない . . . . .

## 第4話 暫つぶし

「外にきてもつまらんもんわつまらん……」  
することもないので散歩をしていたウォーロックは結局のつまらな  
さにイライラしていた。

「スバルがいればウイルスどもを蹴散らして……う、ほか～～  
んと！～！」

ウォーロックが思いつきりじぶしを振るとたまたま当たった電波君  
が・・・・・。

「いたい～～。なにするんですか！～～っていうかとめて～～！  
！」

飛んでいった・・・・・・・・。

（おひと、まづい、ミスったわ・・・・・こうこう時は無視がいち  
ばん。）

逃げた・・・・・（ウォーロックが）

「こら～～この人でなしひ～～～～～！」

（俺もお前も人じゃないだろ・・・・・・・・・・）

ウォーロックはそう思いながらも飛んでく電波君を笑顔でみおくつ  
ていた。

「この電波体なし～～～～～～～～～～～～

今度こそ見えなくなつた・・・・・・・・・・

（それはほんや日本語ぢゃないだろ・・・・・・・・）

笑顔で見送るウォーロック・・・・・・

「まいつか！！」

・・・・・・・・・・・・

「で、話を戻すと・・・・（以下略）」

独り言をがんばるウォーロック。

「で、ウイルスをこう、アッパーでズコ～んと！…」  
(なんか手こたえが・・・・)

「いたいよ～～。なにするの～～～。あ～～～」

飛んでつた・・・・電波君が飛んでつた・・・・

(またかよ・・・・・)

「IJのBAK @?%\$&#～～～」

なんていつたの？

(ついに言葉を越えた・・・・)  
笑顔で見送る・・・・・

「なんか突っ込んでばっかだ・・・・・」

「さて、そろそろ帰るかな・・・・・・・・・・・・」

そして一歩踏み出すると・・・・

ウゲ！！

電波君を躊躇んでいた・・・・・

( ょー、むししてかえるーーなにがあつても帰るぞーー )

「 なにかあるですかーー。」の 力野@&gt;<#￥じん&gt;  
よーつーー。」

( おまえもか・・・・・。いかんいかん! 帰らなければ・・・・  
・ )

そして家に着くまで数々のハプニングがあつたけれどなんとか家に  
たどりついたとさ・・・・

## 第5話 つまんね～

(ハア~~~~~・・・つまらね~~~~~)

「ロック、わざわざかられしかいってないじゃないか。すこしだ  
まってよ。」

スバルの言った通りロックは家にひいてから3分おきに回しセリフを言っていた。

(じょうがね～～だるーーつまんね～～んだからーー)

「じりな～よそんな！」とーーまつたくーー

(お前は同じ本を1億回もよんでも飽きないからそんなことがいえ  
んだ！ーー)

「じゃあさロックも本読んでみたりへー」

(んなめんどこことでやるかーー)

「じゃあもう一回外散歩してくれば？」

(いやだねーー)

「なんにもしたくないならだまつてよ

(ぬか~~~~~ーー)

「ロックもだよ」

「スヽヽバルヽヽ。ご飯よヽヽヽ。」

スバルの母（茜）がスバルを呼ぶ。

L

スバルはロックをほつといて下に下りてしまつた。

( . . . . . . . . . )

ウォーロックも無言で降りてゆく。

このアト一人は次の日の朝までしゃべらなかつた・・・・・・。

「アルテミスよ！信じてよいのだな！！」

「はい、??様。あの女使えそうです。今頃暴れていることでし

「う

？？？さんなんて人はいません。モザイクみたいなモンです。そのうち誰かわかるかと・・・

「そうか。？？？例の武器のチャージはどれぐらいできている？」

上の？？？も同じく。

「あと70・66478%です。おそらくあと3ヶ月はかかるかと・・・」

「急がせろー！」

「はい！？？？様！」

「各戦闘配置に付け！！これより第1次地球侵攻作戦を開始する！」

「「「「ハ！」」」

## 番外編一話 ミソラの誕生日

「おじやましまーーす」

「あらじらっしゃい、ミソラちゃん」

今田はミソラの誕生日。（8月2日がミソラ誕生日）  
ミソラはスバルに誕生日パーティーに呼ばれたのだ。  
だが今星河家にいるのはミソラ以外に茜と暁とスバルしかいない。  
みんななぜか今日に限って忙しかったようだが暁は仕事をサボつて  
きたようだ。

「ミソラちゃん、ちょっと待っててね。そろそろスバルが……」

「

「母さん、ドアあけて！」

茜が言い切る前にスバルの声がドアの向こうから聞こえる。

「はいはい」

バタン

「暁さん席について！ あと例のものもつてー！」

「はいよーー！」

みんなじたばたしてくる。

（十五）準備と計画

(「わなわこわよー。ウオーロックあなたまた雰囲気壊したり今日」) テニートあるわよーーー)

(お前じや俺はたおせねーだろ!—)

(う、うるさいわよ！あんたこいつち来なさい！-)

「いや、ちでじたはたしている」

そして西が吾屋の電気を消す

「あー！ 真、 騒ぎだよ！」

「おまえがどうしたかを聞いて

スバルは持ってきたケーキを真っ暗な部屋の中かんばつて元一フルの上に配置した。

そして暁がのろうそくに火をつけた。

なんだかんだいって実を言うとミソラ以外全員暗視スコープをして

なのでミソラだけ何が起きているかわからず暗闇の中きょとんとしていた。

だがるつそくで若干明るくなつた。

「うわ～～～おこしそうなケーキ……。」

イチゴと生クリームたっぷりのケーキだつた。  
そしてミンラ以外が誕生日の歌を歌いだす。

歌い終わると部屋が明るくなつた。

そしてミンラ以外がクラッカーをパンパンならしていた。  
暁だけはなぜか美味しい棒をもつてゐる。

「…………ミンラちゃん～お誕生日おめでとう～。」

「みんな～ありがとウ～。」

ミンラは目が潤んでいた。

「それにしても暁さんはなぜに美味しい棒をもつてゐるの？」

スバルが気にしていたことを聞いてみた。

「例のものってこれだろ？」

「ちが～～～う～～～ 暁さんが食いたいんでしょ？」

「まあ一人とも落ち着いて～。」

「とりあえずケーキ食べるわよ～。」

「やつた～～～！！」

一番反応したのはミンラだ

「そのケーキはスバルが作ったのよ～～～」  
茜がいろいろ説明し始めた。

「やつなんだー。じゃあいただれやが。」

一番にソラが食べた。

「おいしそうだね！」  
スバル君のケーキおいしいよーーー！」

「じゃあ私たちもたべますか」

「いただめが、」「

みんなフツーに食べてたが暁はケーキに美味しい棒をぶっさしてクリームたっぷりの美味しい棒をまずさいしょに食べていた。

しばらく楽しく話していた。

いた

いはないでくれよ、  
じーとつまんね～～からセ・・・といつた感じの話をした。

「 もう プレゼント タイム よー。」

茜の声とともにスバルがどうかいつてしまつた

「スバル君どうしたんですか？」

「ああ、ちよつとね・・・・・」

「まあいいや」

「はー。//ソラちゃん私からほーれ」

茜が包装紙にくるまれたものを//ソラに渡す。

「わーー洋服だーー サイズぴったりですーー アリガトウ、ソラ  
ます」

中身はピンク色の洋服が入っていた。

「やつぱりサイズはスバルと同じねー」

「じゃあ俺からほーれー」

暁はでっかい箱を渡す。

「・・・・・なにこれ？」

「ん？ これは美味しい棒1年分だ。12種類入ってるぜー」

「じゅ、十二種類も・・・・・」

「ああ！明太子・カレー・チーズ・サラダ・ゴーンポタージュ・チ  
ヨコ・たこ焼き・しょうゆ  
ミソ・豚骨・豚キムチ・ドネルケバブの味が全部会わせて365本  
入ってる。」

たこ焼き以降のはじつさこにはありません。

「す、すいこ・・・・・・・」

(どんな入手経路が・・・・・・・・・)

ミソラが疑問に思つているとスバルが帰つてきた。

「あ、スバル君！ どこ行つてたの？」

「プレゼントとこいつてたんだよ。ほっこれ

スバルは袋をわたす。

「あけていい？」

「うん！ いいよ！」

「わあ！ これって・・・・・・・・・・

袋の中からはスバルのペンダントと同じ物が入つていた。

「専門の業者にたのんでレプリカを作つてもらつたんだ。お守りにもつててよ」

「うん！ だいじにするね！」

「スバルったら、息のいいもの渡すわね～～

その後も話がつづいた。

「さて、そろそろ俺はかかるから

「じゃあね暁さん」

「アリガトウ」<sup>アリ</sup>こました暁さん

暁は帰つていつた。

「じゃあ私もあしたアリマの撮影なんぞ」

「あらやうなの？もつとゆづくつしてつてこのよへ。」

「いいえ、おもくなるとこけないし。」

「わしね、じゃあスバルおくれてあげなむこー。」

「はーーー。じゃあこいへ!!」<sup>アリマ</sup>かやさん

「うそー。」

~~~~~

「スバル君今日はありがとウ」

「いいよべつに、やれアリマギーとこて当然のことをしてただけだよ」

「うそー。」

「あ、バス来たよ」

「おめでたさ」

「じやあね」

ミソラをのせたバスは出て行つた。

• • • • • • • • •

スバルも帰つていつた。

## 第6話 なぜ??

時は流れて2日後。

「委員長どうしたんだろう? 最近委員長学校きてないね。」

(つににあのドリルも不登校か?)

「まさか。 かぜかなんかでしょ。 こんどお見舞いにいこうか?」

その時だった。

いきなりスバルのハンターがなりだした。

「あ、メールだ・・・・・!! シラちゃんからだよ」

(ケツ)

メールを読み上げるスバルの顔がマジだった。

(どうした? 大丈夫か? スバル)

「スピカモールでオヒュカスがあはれてるつーーー!」

(何だとー? )

「大変だよー前より強くなってるんだって!」

(マジか!?)

「早行」の二

「そつち？」

(気にするな)

• • • • • • • •

スピカモール

「ハア・・・・・ハア・・・・・」

(ミソラ！大丈夫？)

「だ、大丈夫・・・・・」

ダメージはあまり受けていないが動きすぎで疲れきっているようだ。

「JRめん...まつた?」

「平氣たけどもう」のHコアには敵はいないよ・・・・・

「遅かつたか・・・・・で・・・・大丈夫?」

「うん・・・一応平氣・・・・たぶん・・・・」

「たぶん!?」

「大丈夫だよ。」

「よかつた・・・・」

「オヒュカス・・・委員長だつた・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「どえ〜〜〜〜!?!?なぜに?」

## 第6話 なにが？（後書き）

1ヶ月ぶりです。

このところの学校がテスト多くて・・・・  
6年生になると学校いそがしいですね・・・・

ついでに執行部だし・・・・

宿題も多くなつて降りますゆえ、これからもあまり投稿できないかも知れません・・・・

まあ

やること

ヨロシク

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3859h/>

流星のロックマン 「神の雷」計画

2010年10月10日01時18分発行